遺族の友

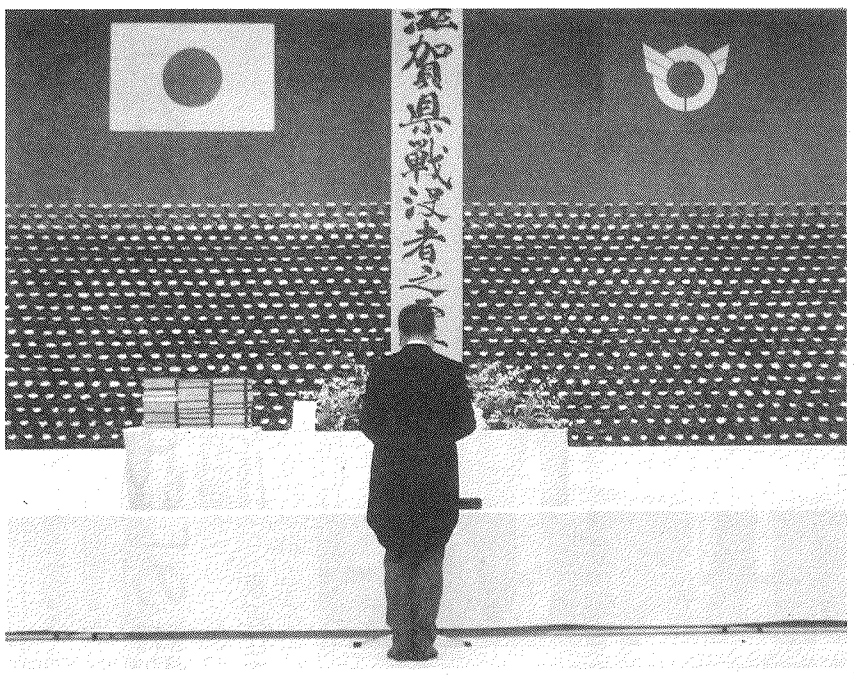
発行所
一般財団法人滋賀県遺族会
滋賀県大津市京町4丁目3−28
（滋賀県厚生会館1階）
電話　(077)522-7227
FAX　(077)522-7233

発行責任者
滋賀県遺族会会長
今堀 治夫

## 平和祈念滋賀県戦没者追悼式

# 風化させない活動を続けていこう

滋賀県遺族会青年部　辻 正人




去る8月26日、県立体育館において滋賀県主催による「令和5年平和祈念滋賀県戦没者追悼式」が開催された。

コロナ禍での人数制限が解かれた今回は、滋賀県知事をはじめ、国会、県議会、市町議会からも多くの議員の方々の参列があり、遺族を含め、県内各地から約650名の参列があった。

滋賀県遺族会の今堀治夫会長からは、「二度と戦没者遺族を出さないこと、戦争の愚かさと悲惨さを語り継ぐために、風化防止活動をこれからも行っていく」との追悼の辞があった。

そして、参列者の献花後、近江兄弟社中学3年生の麻中望さんから平和メッセージの朗読、大津児童合唱団の「故郷」等のコーラスと続き、式典は終始厳かな雰囲気で執り行われた。

また、参列できない人や若い世代に向けて動画投稿サイトを使ったネット中継も実施された。

今回は、追悼式の後に遺留品返還式が行われ、遺霊品（※）返還活動を続けている米国のOBONソサエティーから送られてきた日章旗が遺族の元へ返還され、その奇跡的な事象と92歳の遺族・門阪杢平さんの挨拶に、会場全体が心を打たれた。

※OBONソサエティーではその重要性から、魂の宿った遺留品として「遺霊品」と呼んでいる。

## 平和メッセージ

# 78年前の歴史から学ぶ

近江兄弟社中学校 3年　麻中 望

私は幼い頃から母の影響で、戦争について学ぶ機会がたくさんありました。ですが、「今は平和だから自分には関係ない」と決めつけてしまい、自ら学ぶ姿勢を持てませんでした。

小学生になり、授業で戦争について学ぶことが増えても現実味がなく、どこか他人事のように考えていました。

私の中で戦争に対する考え方が大きく変わったのは、中学2年生の時に行った沖縄研修旅行がきっかけでした。

研修旅行の中で、対馬丸事件の体験者の方にお話を伺いました。その方はお話の最後に、「自然や心、言葉、そして命。戦争は大切な全てのものを奪う」と仰っていました。私はこの言葉を聞いた時に、戦争は自分には関係ないと思っていたことが、とても恥ずかしくなりました。目の前には戦争で家族を亡くし、戦争で傷ついた方がいるということを実感し、体が震えました。

この思いを抱えたまま行ったガマ（洞窟）は、狭くて暗く、戦時中本当に人が住んでいたとは信じられませんでした。その狭いガマの中には、陶器の破片や弾痕がたくさん残っていました。私は陶器の破片を間近で見て、本当に人が住んでいたということを改めて認識したことで、初めて戦争を生々しく感じました。その時見た光景は、今も鮮明に覚えています。

近年では、ロシアによるウクライナへの侵攻によって戦争が起こっています。この戦争は一般人をも巻き込み、今年の7月までで、人的被害に遭われた方は1713万7000人以上となっています。その中で、避難民は約1700万人です。とても多くの人が巻き込まれ、今もなお、この戦争で家族を失った人や家族と会えないまま避難をしている人がたくさんいます。

このことは、78年前の悲劇の繰り返しです。戦争という悲劇を繰り返さないために、私たちは歴史から学ばなければいけません。

今、私たちは学校で戦争について学んでいます。しかし、それだけで十分戦争について学べているとは思えません。例えば、私は守山市に住んでいますが、1945年に起きた守山空襲について学校で学ぶことはありません。空襲での弾痕が残る地蔵を、実際に見に行くこともありません。

そのため、私の周りで守山空襲を知る人はいません。身近な被害について学ばずに、戦争を学んでいるといえるのでしょうか。このままでは、このような痛ましい記憶を知る人がいなくなってしまいます。そんな事態は、平和な未来を築いていくためにあってはなりません。

戦争は二度と繰り返させてはいけない。

戦争で傷ついた心は、もう二度と元には戻らない。

この先、戦争を風化させないために、未来を担う一員として、私は戦争と平和について学び、戦争の記憶と平和の大切さを語り継いでいきます。

## ◆滋賀県護國神社　英霊顕彰館だより

**【入館者ノート】**

☆6月7日　何十年ぶりに兄に逢えました。両親の写真を持って、顔を合わせてやりました。よかった。このようなところにおかざりして、ありがとうございました。安らかに。（京都府男性）

☆7月15日　子、孫、5人でお参りさせていただきました。戦争時代を思い出しております。ウクライナの人々も生きてください。平和を祈ります。（無記名）

☆7月26日　先代の息子の写真を奉納しました。ありがとうございます。一安心しました。（無記名）

☆8月13日　今年は異常に暑い。昭和20年5月、沖縄で没した父も暑かっただろう。（東近江市男性）

（参拝者ノートより抜粋）

**【来館者数】**

※ノート記帳者のみ

6月　11人
7月　30人
8月　35人
9月　14人（23日まで）

今年はことのほか暑かったです。世界中の戦争下や自然災害にあわれた方々は大変な日を送られたと心痛しています。

本紙の校正の間にまた争いが勃発しました。世界の現況を見ると、遺族会が希求する「恒久平和」の実現の難しさを痛感させられます。このような状況下でも、恒久平和への不断の努力と行動の必要を感じます。

英霊顕彰館には多くの英霊が掲げられています。英霊の方々の写真は戦死前で皆若く、神々しい。顕彰館の掲示板には空いている所がありません。戦死された英霊の写真が永遠に残り、心に残るよう、掲示板が埋まればと感じています。

（広報　東郷重明）

## 訂正とお詫び

「遺族の友第272号（令和5年6月30日発行）」の記事に次の誤りがありました。ここに訂正してお詫び申し上げます。

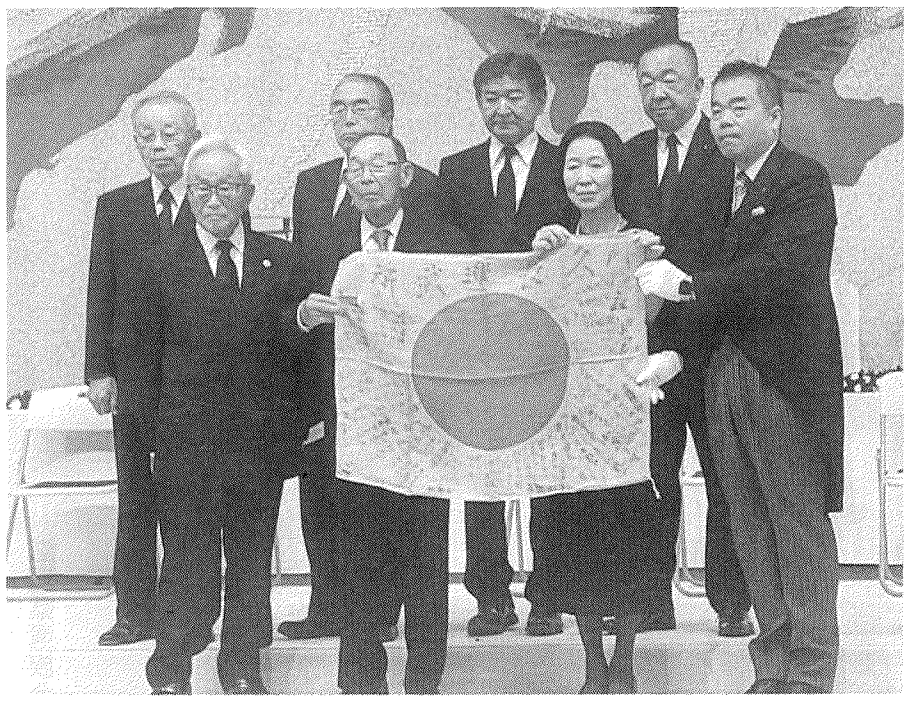
＊2頁「次世代戦跡地訪問」
×久保副会長 ⇒ ○久保副委員長

＊3頁「報恩感謝の心で」
×山本賢二宮司 ⇒ ○山本賢司宮司

## 戦争遺留品返還式

# 「おかえりなさい」の思いを胸に

東近江市遺族会　松浦 友一



日章旗返還式が8月26日、滋賀県立体育館で実施されました。

本年度、返還を受けられる遺族は、東近江市永源寺高野町の門阪杢平氏です。

「遺留品調査票」が届きましたので、1月中旬に同家を訪問し、ご家族の方からお話を伺いました。若干22歳、独身で出征されたとのことで、「戦死したのは私の兄の庄平で、私は弟の杢平です」「遺留品は自分の兄だと思って自宅の仏間にお供えし、永久に自宅保管します」とのことでした。

県戦没者追悼式後の「戦争遺留品返還式」では、壇上で知事が直接「おかえりなさい」と声を掛けながら、遺族の方にお渡しいただきます。これは、知事の強い意向によるものです、とお話させていただきました。

門阪氏は年齢が92歳と高齢であるため、列席され壇上へ上がられるか心配でしたが、足腰も強く、しっかりした口調で話をされており、是非とも自ら出席し、直接受け取り、自宅へ持ち帰りたいとの意思表示をされました。

当日は、東近江市からバス3台を出していただき、総勢105名が参加させていただきました。その中に門阪氏と娘さんの2名の顔がありました。

「令和5年平和祈念滋賀県戦没者追悼式」は、滋賀県下遺族会会員及び来賓の方々も含めますと総勢約650名の列席の中、挙行されました。

本式典終了後、引き続き、返還式が実施されました。開式のあいさつの後、返還に至る経緯説明が滋賀県遺族会会長からあり、その後、知事から「戦争遺留品」が直接、門阪氏に手渡されました。

続いて、ご遺族から「お礼のことば」が述べられました。門阪氏は「本日私は終戦を迎えた事を味わっております」と力強い返礼の言葉を述べられました。その後、体育館一杯の出席者が「おかえりなさい」の思いを胸に、返還された日の丸を中心に記念写真に納まりました。

さて、日章旗返還式は、平成27年に東近江市役所で実施され、翌年にも市役所で市長立ち合いのもと、市関係者や来賓も多数出席して実施されました。

平成29年には、米国で旧日本兵の遺留品を遺族に返還する活動を行っている「OBONソサエティー」のレックスジーク、敬子ジーク夫妻が来日されました。その際、滋賀県を表敬訪問されましたのを機に、彦根市の護國神社で「ジーク夫妻を囲む会」が開かれ、東近江市で日章旗を返還された遺族の方々が、ジーク夫妻に直接感謝の気持ちを伝えました。

先の大戦で出征した日本兵のほとんどが、兵士への愛情と祈りを込めた「寄せ書き日の丸」を肌身につけ持参しました。日本語が読めない連合軍兵たちは、「敵国の旗」だと思い、格好の戦利品として数多くの枚数が持ち去られました。

年月が経ち、「寄せ書き日の丸」の意味を知らされた旗の所有者たちは、是非とも日本の遺族へ返還したいと願われ、旗の提供者と受け取られるご遺族の方々との「橋渡し役」を、OBONソサエティーが担っておられます。一枚でも多くの日章旗が、少しでも早く遺族の方々に返還できることを願っておられます。

なお、日章旗返還式は本年で16回を数えますが、この運動が続行され、一人でも多くの遺族の方に「遺留品」の返還が出来ますことをお祈りいたします。

# 「みたままつり」を終えて

みたま委員会 委員長　吉島 利博

「第47回滋賀県護國神社 みたままつり」が開催されました。今年も例年通り8月13日～15日に実施の予定でしたが、台風7号の近畿地方襲来の影響で、短縮を余儀なくされ、13日・14日の2日間開催となりました。

13日は、短冊吊り、17時半から「みたままつり奉告祭」と点灯式、金魚すくいを予定通りに実施しました。14日は、15日に予定していた「県下戦没者慰霊祭」を繰り上げて執り行い、同日午前中に提燈の撤収と後始末を実施しました。

そして、15日に滋賀県護國神社の神事のみ執り行われました。

近年の「みたままつり」は、コロナ禍や今回の台風襲来など、予定通り事が進まず、非常に残念な思いで、皆様には大変ご心配をお掛けしたことと思いますが、関係者各位のご協力のお陰で無事終了することが出来ました。誠にありがとうございました。

次年度からは、例年通り、無事に実施される事を願うばかりです。

# 沖縄慰霊行進に参加して

東近江市遺族会　藤澤 喜八郎

沖縄全戦没者追悼式が、6月23日に沖縄平和記念公園で開催され、滋賀県から4名が参加しました。

その前日には沖縄平和祈念堂において前夜祭が行われ、当日は正午から沖縄県知事の式辞、黙祷。岸田内閣総理大臣をはじめ、各界来賓の追悼の辞が述べられ、参加者全員が焼香を行い、式典は終了しました。

この式典に内閣総理大臣が参列されるようになったのは、平成2年に海部内閣総理大臣が参列されてからだそうです。

また、沖縄県遺族連合と日本遺族会が主催する「第62回平和祈願慰霊大行進」は、コロナ禍で4年振りに沖縄県「慰霊の日」の追悼式に併せて行われました。沖縄県と各県からの参加者は、遺族の高齢化に伴い、コロナ禍前の半数で約300人に減少し、歩く距離も以前の半分となりました。

当日午前9時に糸満市「ひめゆりの塔」の駐車場に集合し、かつて激戦の地であった一帯約4キロを行進しました。

この平和行進には過去何回か滋賀県沖縄慰霊巡拝に併せて参加しておりますが、最初に参加したのは約20年前。糸満小学校から約10キロ、さらに糸満市役所から約8キロ歩いたと記憶しております。

もうこれが最後の機会と思い心配しながら参加しましたが、歩くペースが以前よりゆっくりであったことで、完歩することが出来、我ながら「よくこれだけ歩けたものよ」と満足しています。

# 「女性部研修会」盛大に

女性委員会委員長　辻 成子

秋晴れの9月23日、県立男女共同参画センターで「令和5年度滋賀県遺族会女性部研修会」を開催しました。お彼岸の中日で各地行事の多い中、理事・監事・評議員・市町会長・青年委員等38名、女性会員119名、合計157名の参加を頂きました。開会式で今堀治夫会長と中川真澄副会長の挨拶があり、有村治子参議院議員、英霊にこたえる会中央本部副会長國松善次氏にご臨席頂きました。

その後、有村治子氏による「穏やかな心で凛として」と題する次のような講演がありました。

幸せとは、どういう事が幸せですか？　戦争や災害のない、亡くなる人がいない、安心して暮らせる日常生活こそ、幸せではないですか。人や国、物も、見る角度によってとらえ方が違う。あらゆる角度から見ることが大切です。

私は、遺族の方の形見である千人針をインターネットで取引されていることは、戦没者の心情を傷つける行為だと平成28年に主張し、翌年にはインターネットオークションで競売を自粛するようになりました。

今年8月26日、県主催の戦没者追悼式には「寄せ書き日の丸」を遺族の方に返還する式に立ち会いました。遺族の方々の多くは、年に一度は靖國神社へ参拝し、お父さんやおじさんに近況報告に行きます。一方、令和3年10月17日、菅前首相は、記者団に「国の為に尊い命を捧げた英霊に対し尊崇の念を表し、同時に御霊のご冥福をお祈り申し上げた」と述べられました。

有村氏は、安倍内閣での初代女性活躍担当大臣としての活動等、幅広い活動をされてきました。パワーあふれる行動力で皆が元気を頂いています。今後、益々の政治活動を期待します。

その後、守山市の杉江周作氏の体験談でしたが、松浦友一副会長の代読となりました。

私は、昭和7年生まれで、91歳です。私の父は昭和18年、ニューギニアで戦死しました。私が11歳でした。父と一緒に暮らした記憶はほとんど残っていません。父は、支那事変に砲兵として参戦しています。大東亜戦争開戦の年の春に召集され、タイ国に駐留しました。開戦に備えていたものと思われます。開戦でマレー半島を南下、船舶工兵としてシンガポール領戦に参戦していたようです。以降、南方の島々攻略の戦闘に参加。フィリピン、ジャワ、ボルネオ、セレベスの島々、ラバウルから東部ニューギニア、そして「ソロモン諸島の一島嶼の沖で戦死す」の報をもらっています。

遺族会の戦跡慰霊巡拝団で、幾度か東部ニューギニア方面を訪ねていますが、そのほとんどは上空からでした。ただ一度、ガダルカナル島を舟艇で訪ねたことがあります。空に伸びるヤシの林、その古木、落ちたヤシ殻、落葉など道の無いジャングル。大砲の残骸の点在。「何でこんな所へ」が上陸した時の第一印象でした。木々の間から見上げる空は、絵の具の空色そのもの。父が見たのもこのような景色だったろうか。涙をしのんで無言で頭を下げ、想いを胸にしまってその場を離れました。「また来るで、待っててや」。ソロモンの上空を飛び立ちました。

私たち戦争犠牲者の家族は、苦しく悲しい戦後人生を経験することとなりました。今ここに本大戦でお亡くなりになられた戦没者及び本戦争で犠牲になられた方々に対して、心からの慰霊と哀悼の誠をささげたい。

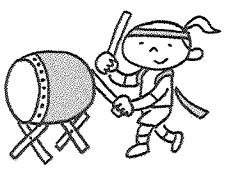
以上のように述べられました。

最後に、雰囲気ががらりと変わり、アトラクションとして深尾勝義さんの江州音頭がホールいっぱいに響き渡りました。深尾さん手作りの「舟と櫓」でこぎながら、江州音頭を永年鍛えた喉で唄い始めると、なじみのある音頭に皆集中しました。

江州音頭の発祥は幕末の頃。祭文語りの名人桜川雛山に弟子入りした八日市の西澤寅吉が念仏踊り、歌念仏も採り入れた八日市祭文音頭を完成させました。祭文とは、もともと山伏や修験者が神社仏閣の祭の中で神仏に告げる文のこと。又、豊郷町にも江州音頭発祥の地の石碑があります。江州音頭の歴史を説明しながら、いろいろな江州音頭や淡海節などを聴くことができました。そして自然とフロアに踊りの輪が出来、

「江州音頭を楽しみましょう」を満喫しました。

さて、遺族会員の平均年齢は82歳と聞きます。高齢化が進むと、足腰が痛み、病気、老々介護、自動車の免許返上等、否応なくやってきます。現役のお仕事をしながら大変でしょうが、よろしくお願いします。各郡市の青年部の皆さんの活躍も期待しています。いつも各郡市で遺族会活動に若い力を吹き込んで頂き、感謝しています。



# 県戦没者英霊塔の彼岸法要に参拝して

甲賀市遺族会　西浦 富一

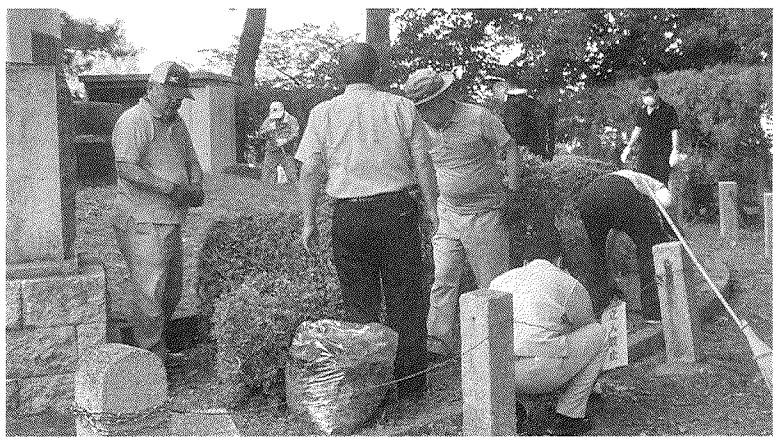
太平洋戦争終戦から78年。高台に英霊の眠る皇子山陸軍墓地、琵琶湖湖畔に祀られる滋賀県戦没者英霊塔に今年も彼岸法要で参拝させて頂きました。

戦争の悲惨さを語り伝えることを我々世代の使命としてきました。遠い国とは言え、ウクライナ戦争の勃発で戦争の恐ろしさを目の当たりにする毎日。我々世代、孫たちにどう説明すればよいのか、今の惨状を英霊にどう報告すべきなのか。祈りながら考え続けました。

ウクライナ、アルジェリア等、事情は理解できませんが、戦争の悲惨さははかりしれません。只々、戦争のない世界を為政者に声を大きくして訴え続けねばなりません。日常の平和のありがたさを感謝し、同時に不安さを隠しきれぬ一日でした。

# 膳所公園英霊塔の清掃奉仕

英霊顕彰委員会　伴 忠信



令和3年に三日月大造滋賀県知事の発案で始まった、終戦祈念月の膳所公園英霊塔の清掃奉仕を今年も実施することが出来ました。猛暑の中、早朝よりご奉仕いただいた皆様に感謝申し上げます。

8月22日午前7時30分から、大津市の膳所公園内にある英霊塔の清掃を、三日月知事と県秘書課並びに健康医療福祉部の皆様、遺族会からは今堀治夫会長、事務局・英霊顕彰委員会の主メンバーで行いました。

昭和30年に建立の英霊塔は、観音様膝下が堂宇となっており、観音様の後姿を見ながら入堂します。

先の「大東亜戦争」による滋賀県出身の戦没者は約3万3000人ですが、そのうち、ご遺族の確認を得た約2万人の戒名・俗名を記した御位牌が、地域別に整然と祀られております。

建立から68年も過ぎますと、多くの事象があります。

平成7年1月17日午前5時46分に近畿地方を揺るがした阪神淡路大震災により、祀られていた御位牌が一柱も建っていなかったとのことです。役員の皆様が、混ざり合った御位牌一柱ずつ、出身地を確認しながら再び祀られたとお聞きしました。

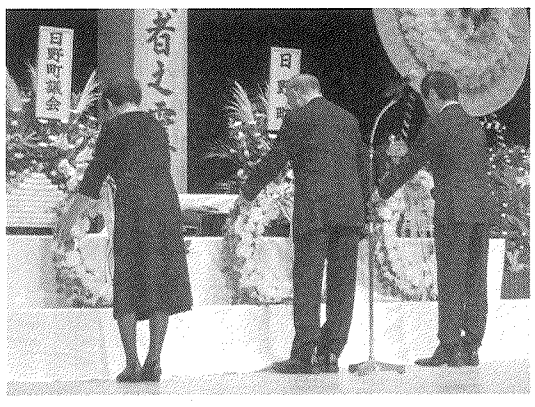
戦没者一人に一柱の小さな御位牌ですが、これだけ数多くを目にすると、戦争の恐ろしさ、愚かさ、悲しさと平和の尊さを再認識させられます。

毎月15日は膳所公園の英霊塔の清掃日で、英霊塔堂宇の扉を開けております。ご遺族の皆様、ご先祖様がお待ちです。約2万柱の御位牌からご親族様を見つけてお祀りしてください。

# さざなみ

## 通常開催された追悼式

日野町遺族会
奥野 義明




去る8月20日、先の大戦に従軍して犠牲となられた日野町出身戦没者1000余柱の方々の追悼と、永遠の平和を祈念する「令和5年度日野町戦没者追悼式」が、町民ホール「わたむきホール虹」において開催されました。

堀江和博日野町長、今堀治夫滋賀県遺族会長、杉浦和人町議会議長、並びに町議会議員、遺族会員、行政関係者ら、コロナ禍前規模の約170名が参加しました。

式典は、25名の日野少年少女合唱団によるオープニングセレモニーで始まり、町長の開式の辞、各支部霊簿の奉献、遺族代表並びに主催者献花の後、町長式辞、町議会議長及び滋賀県遺族会長の来賓追悼の辞がありました。

式典の最後は、主催者を代表して堀江町長が「高齢化が進む中、戦争の悲惨さをこれから次の世代にどうつないで行くかが課題であり、この式典はもちろんのこと、この思いが末永く後世に受け継がれるよう、思いを新たにした」と挨拶されました。

日野町遺族会を代表して私から「私たち遺族会は高齢化と会員の減少に直面しておりますが、慰霊巡拝など英霊顕彰事業を通じて、戦争の悲惨さ、平和の尊さを次世代に語り継ぐ事業を進めておりますので、今後とも各種事業へのご支援ご参加を頂きたい」と挨拶させていただきました。

式典の後には、日野少年少女合唱団の皆さんによる「未来へつなごう～平和を願って～」のメッセージが歌声に乗せて届けられ、平和の尊さを噛み締めました。

## 平和のつどいに参列して

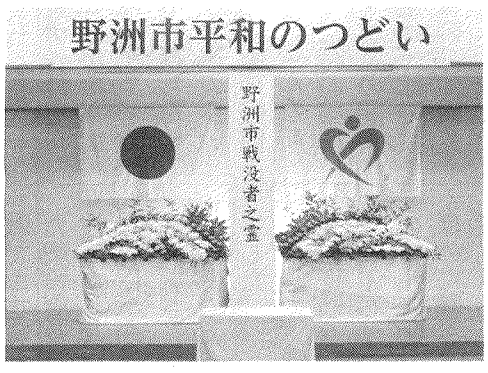
野洲市遺族会
野路 嘉久

「令和5年度野洲市平和のつどい」が、8月10日に野洲市総合防災センターで市主催の下で厳かに執り行われた。

今年も戦没者慰霊と平和な暮らしに感謝の思いで参列した。開式前の厳粛な流れに包まれて、国歌斉唱と黙祷のあと、栢木進野洲市長から郷土の戦没者に慰霊の誠と平和社会に感謝を込められた式辞で始まった。

各界代表者からも追悼のことばがあり、参列者一同で白菊を献花して往時を偲ぶことができた。野洲市あげての平和のつどいであり、戦没者を追悼する思いは等しいが、遺族会員の参列が少なく、寂しく感じられた。

第二部では、次世代戦跡訪問をした市内中学生3名の皆さんから、それぞれに体験された平和への思いを上手く表現され、感銘を受けた。続く講演では、「滋賀で学ぶ戦争の記録」との演題で、滋賀県平和祈念館の上田智史主査が、戦中戦後に関わる記録を分かりやすく講演された。最後に、野洲市遺族会長から野洲市長に平和のつどいが広く市民に伝わり各種団体からの参列者が定着することと、忠魂碑や慰霊碑の維持管理の今後について要望書が渡され、閉式となった。




講演と同時に、臨時召集令状の赤紙、旧陸軍の軍服、焼夷弾の筒、鉄兜といった展示品が参列者の間で回され、戦没者遺族には切ない感触であった。実物の鉄兜に手が触れた瞬間には目頭が熱くなった。

昭和51年8月、私は旧厚生省が所管するソロモン諸島ガダルカナル島の厳しい自然環境の密林内で、ひたすら戦没者のご遺骨を探し求めた悲しみを体験した。そこは、餓死島（ガ島）で知られ、食糧の補給が途絶えて栄養失調の体にハエと蚊が媒介したアミーバ赤痢に悩んだ挙句の戦死者が多かった。密林内の奥地で、異国の土に覆われた数知れない鉄兜に遭遇できた。無心の面持ちで静かに手を添えたら、白い歯並びのご遺骨との対面で涙が湧出した。直ぐには手がつかず、持参していたお線香で合掌した。密林内の旧戦場で30数年間も思い、鉄兜を身に着けたままの野ざらしのご遺骨が無念にも散乱していた。

他にも多くのご遺骨や飯盒、水筒などが、雨季に密林の斜面から沢伝いでソロモン海に流れ出た様子で、道案内人の現地住民の証言もあって、その協力手助けが頼りの作業であった。

あの密林の奥で携えた鉄兜の重さが脳裏をかすめての感触となった。平和でモノが溢れた暮らしの中では実感できない、平和慣れが当たり前の時代になってしまった。もはや、戦後も78年を数えるが、何事にも左右されない平和社会でありたい。

## 被爆体験伝承者の話を聞く

甲賀市遺族会
大治 正雄

8月20日、「甲賀市平和祈念戦没者追悼式」が執り行われました。

戦争で犠牲となられた人々の追悼のため、市の主催で毎年行われています。

岩永甲賀市長は、式辞で次のように話されました。

「教育・福祉を始め、住みやすい甲賀市づくりに取り組んでいることと共に、全国310万余人の尊い犠牲のうえに、現在の平和な社会が築かれている現実を大切に守って行く必要がある。世界の現状に目を向けると、ロシアのウクライナ侵攻を始め、各地で紛争が絶えない。一日でも早く終息することを願う」

また、本年より世界平和の願いを込めて「平和祈念」の文字を入れた名称での実施となりました。しかし、ご遺族の高齢化と共に年々参加される人が少なくなり、残念に思っています。

その後、会場を変えて「広島被爆体験伝承懇話会」が催されました。追悼式典に併せて、広島市から伝承者の甲斐晶子氏をお招きしての被爆体験談の企画でした。

1894年の日清戦争に始まって、8月6日広島に、そして9日には長崎に原子爆弾が投下された1945年の第二次世界大戦の終結に至るまでの時代背景から話は始まりました。至近距離で被爆された当時12歳の兒玉光雄さんから直接受け継がれた被爆体験や平和への思い、戦時下の人々のくらし、被爆被害、原爆の体への影響や伝承者としての苦労談、平和への思いなどについて、DVDの記録動画や記憶で書かれた油絵を中心に、約1時間の貴重なお話をいただきました。伺っているうちに、70年ほどの遠い昔に見た映画「ひろしま」を思い出していました。

会場には、真夏の最中ではありましたが、小学生の親子を始め、60数名の市民が熱心に耳を傾けました。又、併せてホールのロビーには、原爆により被害を受けた人や建物などの写真も展示されていました。

## 全世界が戦争をしない国になって欲しい

近江八幡市安土町
水原 滉仁、水原 幌晴、水原 晃琉、崎野 将行

僕達の曽祖父は第二次世界大戦で亡くなっています。フィリピン・ミンダナオ島で戦死したと聞かされています。祖父がそのことで苦労したことは幼い頃より聞いてきました。

今年8月13日に、父と僕達三兄弟で護國神社・英霊顕彰館にお参りさせて頂きました。亡くなった方々のお写真が飾られているのを見て、特攻隊員の遺影を思い出しました。

修学旅行で知覧特攻平和会館に行きました。同い年か、僕よりも若い兵士が、ここから特攻機で出立し帰らぬ人となりました。1945年4月1日～6月11日までの約2カ月半に439人の特攻隊員が陸軍の特攻作戦で亡くなったそうです。アメリカの大型艦船に肉弾となり体当たりした隊員の遺影、遺品、記録等から、戦争の悲惨さ、平和・命の尊さを学びました。

今、僕達は平和な時代にいます。飽食のなかにいます。給食もとてもおいしいです。給食を残しても怒られません。欲しいものはお金さえあれば何でも買うことができます。すこし歩けばコンビニがあります。

戦争で亡くなった方々には申し訳ないような気持ちがしてきました。当たり前のように朝起きて、毎日学校に行かせてもらっている。この当たり前のことができる毎日こそが平和なのだ。

曾祖母、祖父、父が沙沙貴神社の宮司さんから頂いた火種を、護國神社の不滅の法灯に採火させて頂いたと聞いています。僕たちもお年玉の一部を油代として奉納させて頂きます。ロシアのウクライナ侵攻が、一日でも早く終結しますようにと願いながら…。